

(1) 古いツボには灸・灸頭鍼

腰の場合と同じように、慢性期の型を中心に治療していき、鍼のみでは変わりにくい古いツボが見付かったときには、その古いツボに灸や灸頭鍼をする。それを切っ掛けに体全体が大きく変化していくことが多い。

(2) 古いツボが出やすい所

慢性期の型で診察刺鍼をしながら古いツボを見付ける。古いツボは、表面はペコペコで、押すとしばらくフニャフニャしていて、ずっと奥にとてもしばらく硬い痼りがある。腹、首から肩や肩胛骨の周り、脇の下から上腕陰経の3か所を中心に探す。

腹側では、腹診のときに説明した臍の周りの上下左右盲愈、章門、五枢～維道。その中で、肩によく関係しているのは、臍より上の、左右の上盲愈、左右章門。それ以外では、正中線上の中腕、肋骨の腹側などに出ることも。

首から肩や肩胛骨の周りでは、横頸部中央、肩貞、上腕太陽経の肘側などの辺りに多い。首の横側の付け根や肩井、頸椎・胸椎1～5の直ぐ脇の華陀経、首の前側、肩胛骨の周りにも出る。不眠を伴う場合は、天柱～風池。

脇の下～上腕陰経は、辛くない範囲で腕を横に上げて、腕と平行に出ている溝を見付け、その溝の中で押して最も痛い所。そこが脇の下で灸や灸頭鍼がしにくいときには2番目を取る。

腹から1,2か所、首肩背から1,2か所、脇の下から1か所位を選ぶ。

(3) 補の灸

古いツボには、10壮以上据えてやっとなかさをを感じる位の弱刺激の「補の灸」。体全体の力がクニャーと抜けることを目指す。

この灸の後に刺鍼してもよく、奥の硬いシコリが弛みやすい。特に不眠を伴うときの天柱～風池などに刺鍼してみるとよい。

(4) 補の灸頭鍼(枇杷の葉+炭艾)

先ず、奥の痼りまで鍼を深く刺す。肩の周りは肺があるので、肋骨より下には刺さないよう注意。

炭艾用灸頭キャップの上の部分に、あらかじめ鍼柄が通る穴を開けておく。置鍼した周囲にアルコールに枇杷の葉を漬けた液を塗り、直径3cmアルミ箔、直径5cm位に厚紙(葉書の厚さ)を切ったもの、弁当のおかず用のアルミケースの四つの、それぞれ真ん中に鍼柄が通る穴を開けたものを、アルミ箔、厚紙、アルミケースの順に、鍼に穴を

通して積む。その上から少し距離を開けるために、ビール缶のステイオンタブを曲げたモノなどを置き、その上に炭艾用キャップを置き、炭艾を乗せる。すると、皮膚から炭艾の距離を一定にできるし、重さで鍼が曲がってしまうこともない。

そして、点火。熱過ぎたら、紙とアルミケースの間に緩和用の厚紙(楔形の切り込み入り)を入れて加減。体全体の力がクニャーと抜けるまで繰り返す。が、灸頭鍼用艾よりも熱量も大きく時間も長いので1回で十分なことも多い。奥の痼りが弛み、鍼柄が皮膚に付いて火傷することがあるので注意。灰処理は、アルミケースを持ち、それより上の物を全部一緒に外せば簡単。このとき、シコリが弛んだせいか、鍼が抜けやすいので注意。

(5) 手順

慢性期の型をして、古いツボを3～5か所位選ぶ。座位、うつ伏せ(横向き寝)、仰向けの順で、補の灸・灸頭鍼。灸や灸頭鍼をする所が上を向くように姿勢を選ぶ。臍の周りなど鍼して痛みやすい所や、ツボが浅くて灸頭鍼中に鍼が抜けそうな所は補の灸。それ以外は灸頭鍼。仕上げに手の指の骨空か指端に熱い寫の透熱灸(逆上せ止め&目覚まし)。

以前の治療で古いツボが見付かっているときや、診察中に古いツボが見つかった場合で時間がないときは、手の陰陽に引き鍼した後で、補の灸・灸頭鍼をしてもよい。この場合も、骨空か指端で後始末。

要点

- ① 肩の古いツボは、脇の下～上腕陰経にも出る
- ② 「ぼわん、くにゃあ」という感じに
- ③ 古いツボは、灸頭鍼で弛みやすい